

蟹江町歴史民俗資料館 おうちミュージアム

第27回 蟹江町と伊勢湾台風^{い せ わんたいふう}



被災した蟹江小学校

今回のおうちミュージアムでは、蟹江町を襲った伊勢湾台風^{い せ わんたいふう}を紹介^{しょうかい}します。

① ^{い せ わんたいふう}伊勢湾台風について

^{じょうりく} 上陸した日	1959 年(昭和 34 年)9 月 26 日 午後6時過ぎ
^{じょうりく} 上陸した場所	^{き い はんとう} 紀伊半島 ^{しおのみさき} 潮 岬 付近
^{じょうりく} 上陸時の中心気圧	920hPa
^{じょうりく} 上陸時の最大瞬間風速	45.7m/s
名古屋港での ^{たかしお} 高潮	3.55m

参考:『愛知県史 通史編9 現代』(愛知県、2020 年)

1959 年(昭和 34 年)9月26日、とても勢力の強い台風15号が^{き い はんとう}紀伊半島に^{じょうりく}上陸し、日本各地で大きな被害をもたらしました。なかでも^{あいちけん}愛知県や^{みえけん}三重県など、^{い せ わん}伊勢湾のまわりを中心に大きな被害をもたらしたことから、「^{い せ わんたいふう}伊勢湾台風」とよばれるようになりました。

② ^{ひ が い}どうして大きな被害が出たの？

^{ししや ゆくえふめいしや} 死者・行方不明者	5,098 人 (^{あいちけん} 愛知県3,260 人、蟹江町 18 人)
^{あいちけん たてものひが い} 愛知県での建物被害	^{ぜんかい} 全壊 23,334 ^{とう} 棟 (^{かにえまち} 蟹江町 328 棟)
	^{はんかい} 半壊 97,049 ^{とう} 棟 (^{かにえまち} 蟹江町 624 棟)
	^{ゆかうえしんすい} 床上浸水 53,560 ^{とう} 棟 (^{かにえまち} 蟹江町 1,688 棟)
	^{ゆかしたしんすい} 床下浸水 62,831 ^{とう} 棟 (^{かにえまち} 蟹江町 367 棟)

参考:『愛知県史 通史編9 現代』(愛知県、2020 年)、蟹江町史(蟹江町、1973 年)

^{い せ わんたいふう}伊勢湾台風では、日本各地で 5,098 人の^{ししや ゆくえふめいしや}死者・行方不明者を出したほか、多くの建物も被災しました。

このような大きな被害が出たのは、いくつかの理由があります。

1. ^{たいふう}台風の^{せいりよく}勢力

^{たいふう}台風の^{せいりよく}勢力は、hPa(ヘクトパスカル)という数値で示されます。この数値が

低いほど、台風の勢力^{せいりよく}が大きくなります。伊勢湾台風は多くの犠牲者をだしたことから、室戸台風^{むろとたいふう}(1934年(昭和9年))、枕崎台風^{まくらざきたいふう}(1945年(昭和20年))とともに、「昭和の三大台風」といわれています。

また最大瞬間風速^{さいだいしゅんかんふうそく}(もっとも強い風)45.7m/sという数値は、電柱^{たお}が倒れるほどの強さでした。

2. 高潮^{たかしお}の発生^{はっせい}

高潮^{たかしお}とは、台風^{たいふう}によって気圧が低くなったり、海水が吹き寄せることで海面が高くなったりすることをいいます。伊勢湾台風では、さまざまな条件^{いせわんたいふう}が重なったことで、3.55mもの高潮^{たかしお}が起きました。

3. 海拔^{かいばつ}ゼロメートル地帯^{ちたい}

海拔^{かいばつ}ゼロメートル地帯^{ちたい}とは、満潮時の海水面よりも低い土地のことです。蟹江町を含めた海部地域は海拔^{かいばつ}ゼロメートル地帯^{ちたい}であるため、堤防^{ていぼう}が崩れると海水に^{しず}沈んでしまい、浸^つかったままになりました。

4. 防災意識^{ぼうさいいしき}の不足

当時の伊勢湾^{いせわん}のまわりに住んでいた人たちは、大きな高潮被害^{たかしおひがい}が数十年間なかったため、安全な場所だと思いこんでいました。

5. 台風^{たいふう}による停電^{ていでん}

当時はコンセント式のラジオで台風情報^{たいふうじょうほう}を聞いていました。しかし伊勢湾台風^{たいふう}による強い風のせいで夕方から停電^{ていでん}になると、ラジオから新しい情報が聞けなくなりました。さらに夜になると、避難^{ひなん}や救助^{きゅうじょ}も十分にできず、被害^{ひがい}が拡大^{かくだい}しました。



昔のラジオ

③ 蟹江町における被害^{ひがい}

蟹江町でも各地で堤防^{ていぼう}が崩れ^{くず}、建物や道路、鉄道も海水に沈^{しず}んでしまいました。



水没した蟹江町役場(城一丁目)



水没した須西小学校(須成西六丁目)



水没した近鉄名古屋線^{きんてつ なごやせん}(城四丁目)



水没した商店街^{しょうてんがい}(城一丁目)

④ 伊勢湾台風からの復興^{いせわんたいふう ふっこう}

伊勢湾台風^{いせわんたいふう}が過ぎると、全国各地からたくさんの衣類^{いるい}や食べ物も送られてきました。無事^{ぶじ}だった人々も、少しずつ^{ふっこう}復興に向けて歩み始めました。また多くの学生がボランティアとして救援活動^{きゅうえんかつどう}や復旧活動^{ふっきゅうかつどう}に参加しました。



各地からの救^{きゅうえんぶっし}援物資(城二丁目)



修理^{しゅうり}される堤防^{ていぼう}(本町十丁目)



小舟^{いどう}での移動(新千秋)



ポンプによる排水^{はいすい}(須成)

⑤ そして^{げんざい}現在へ

伊勢湾台風^{いせわんたいふう}による被害^{ひがい}を受けて、1961年に災害対策基本法^{さいがいたいさくきほんほう}という法律^{ほうりつ}が作られ、全国でダムや堤防^{ていぼう}の整備^{せいび}が進められました。蟹江町でも、大きな堤防やいくつかの排水機場^{はいすいきじょう}が作られました。排水機場^{はいすいきじょう}とは、大きなポンプによって水を川^{なが}へと流し、水害を防いでくれる施設^{しせつ}です。このような施設^{しせつ}ができたことで、水害による被害^{ひがい}も大きく減^へりました。

しかし、現在でも全国各地で台風だけではなく自然災害^{しぜんさいがい}による大きな被害^{ひがい}が起きています。「天災^{てんさい}は忘^{わす}れた頃にやってくる」という言葉のとおり、私たち自身が防災意識^{ぼうさいいしき}をもち、この出来事^{わす}を忘れないことが大切です。



蟹江川排水機場(蟹江川河口)



いまはいすいきじょう
今排水機場(城一丁目)



冠水情報板のあるアンダーパス(富吉三丁目)



伊勢湾台風の浸水表示(学戸三丁目)



「戦没者・伊勢湾台風殉難者鎮魂」碑(新千秋)



蟹江町ハザードマップ